

人々の笑顔があふれる「地域づくり」を応援する

# 地域づくりinほくりく

2015 NEW YEAR



世界遺産の明かり  
雪深い合掌から漏れる明かりに  
尊いものを感じる。

絵 土田 和男

- |  |   |   |    |
|--|---|---|----|
| ◆ 新年のご挨拶<br>大林 厚次(北陸地域づくり協会 理事長)   | 2 | ◆ 特集「地域とともに」<br>地域の笑顔を支える道の駅<br>道の駅<br>「瀬替えの郷せんだ」(新潟県十日町市)        | 10 |
| ◆ 年頭のご挨拶<br>野田 徹(北陸地方整備局長)   | 3 | ◆ シリーズ「次世代に向けた地域の魅力づくり」<br>若手アーティストと地域をデザイン<br>studio こぐま(山形県小国町) | 12 |
| ◆ 随想<br>谷本 亙(まち&むら研究所 代表)<br>「人とモノの交差点<br>-北陸の食の魅力を感じる-」                       | 4 | ◆ 北陸再発見<br>ねずみ大根とおしぼりうどん<br>(長野県坂城町)                              | 14 |
| ◆ 特別企画 災害の教訓を未来に活かす<br>「阪神淡路大震災から20年<br>-経済復興の社会技術の発達と展望-」<br>(永松 伸吾・関西大学 准教授) | 6 | ◆ 会員だより   | 16 |
|  |   | ◆ 伝言板   | 20 |

## 新年のご挨拶

(一社)北陸地域づくり協会 理事長

おおばやし こうじ  
大林 厚次



新年明けましておめでとうございます。

会員の皆様におかれましては、健やかに新年を迎えられたこととお喜び申し上げます。

今年は北陸の長年の悲願でありました北陸新幹線金沢開業を3月14日に控え、昨年12月から開業を見据えた列車の試験運行が始まり、また関連する道路や都市施設整備等の街づくりも着々と進み、あとは開業を待つばかりになってきております。沿線地域ではそれぞれ地域の売りの食材や観光等を各種ツールを活用し発信しており、開通後の国内外との交流促進を期待し地域は大きな盛り上がりを見せているところです。

建設産業を取り巻く環境は政権交代後のアベノミクスの景気刺激策として、公共事業として大型補正等の財政出動が行なわれ明るい兆しが見えてきたところに、突然の年末衆議院解散。争点はこれまでのアベノミクスの是非を問う選挙。結果は政権与党の大勝に終わり、アベノミクスの更なる推進が図られる事となり建設関係は引き続き期待出来る結果となりました。しかし、景気回復はまだまだ一部の範囲に限られているようであり、早く全国の津々浦々まで実感できる社会になってもらいたいものであります。

昨年は災害に悩まされた一年でありました。2月の関東甲信越を中心に異常降雪による交通障害と孤立集落、平成26年8月豪雨による兵庫県等の浸水被害や広島市の土砂崩落、9月の御嶽山火山噴火、11月の長野北部地震等、特に近年は多岐にわたる災害に見舞われ尊い生命と財産を失うこととなりました。これらの経験を活かし教訓を伝え防災・減災対策を講じなければなりません。

新潟県も過去に大きな災害に見舞われてきました。昨年は新潟地震から50年、新潟焼山火山災害から40年、新潟・福島豪雨、中越地震から10年。昨年は節目の年であり関係者が連携して災害に負けない新潟、災害に強い新潟県を目指し「防災・減災新潟プロジェクト2014」の活動によってこれまでの教訓を伝え活かす取り組みが行なわれてきました。

こうした災害時、その地域に精通した建設産業の人たちが出動して障害物等を処理しないと、自衛隊や消防、警察関係の方々や被災地に入れないのが過去の災害からも明らかであります。その意味では災害時に建設産業の果たす役割は非常に大きなものがあると思います。しかし、建設産業の現状は過度の競争によるダンピングや担い手不足等、非常に厳しい状況に置かれております。

このことから昨年、インフラ等の品質確保とその担い手確保を実現するため、公共工事の基本となる「品確法」を中心に、密接に関連する「入契法」、「建設業法」も一体として改正されました。いわゆる担い手三法であります。この基本理念を実現するために発注者の責務の明確化がなされ、受注者は社員の法定福利等建設産業の近代化等に向けた取組み等を行い、魅力ある建設産業にしなければならない大事な年であります。

さて、当協会は一昨年の4月に一般社団法人に移行し、国からの要請である発注者支援業務等からの撤退を事業譲渡手法により行うこととし、その業務の受け皿として一昨年の10月に新会社「(株)建設マネジメント北陸」を多くの関係者の協力により設立し、同年12月に最初の譲渡を行いました。昨年の12月には第2弾として公物管理補助業務の譲渡を行い、今年12月の第3弾を最後に概ねの譲渡を終える計画であります。

しかし、当協会は今後も組織を維持継続していかなければならない責務を担っており、健全な管理運営をするためにも新たな業務の発掘や業務を担う体制づくり等、多くの課題が山積しております。これからも各協会と連携をとりながら職員一丸となって取り組んで参りますので、引続き会員の皆さまのご指導、ご鞭撻をいただきますようお願い申し上げます。

終わりに、今年は皆様にとって明るく素晴らしい一年になりますようご祈念申し上げご挨拶といたします。

## 年頭のご挨拶

国土交通省 北陸地方整備局長

の だ とおる  
野田 徹



平成 27 年の新しい年を迎え、謹んで年頭のご挨拶を申し上げます。

一般社団法人北陸地域づくり協会の会員の皆様方には、平素より北陸地方における国土交通行政の推進に、ご支援とご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

新たな年においても、北陸地方の社会資本の整備と管理について強力に着実に進めてまいりますので、皆様方のご協力を宜しくお願い申し上げます。

さて、国土交通省では平成 26 年度当初予算及び平成 25 年度の補正予算と一体となった 15 ヶ月予算をもって「東日本大震災からの復興加速」、「国民の安全・安心の確保」及び「経済・地域の活性化」の 3 分野に重点的に取り組んでいます。

北陸地方整備局管内においても、去年は国道 41 号大沢野富山南道路の新規事業着手、信濃川大河津分水路可動堰改築事業の竣工と抜本的改修に向けての調査着手、日本海沿岸東北自動車道朝日～温海間の測量・設計の全面着手、さらに道路施設の老朽化対策の連携・強化を図るための道路メンテナンス会議の各県設置など、地域の安全・安心の確保や地域経済の活性化に向けて大きな進展がありました。

また、去年は新潟地震から 50 年、新潟・福島豪雨災害、新潟県中越地震から 10 年など様々な自然災害から節目の年となったことから、「教訓を伝えて活かすまちづくり」をキャッチフレーズに「防災・減災 新潟プロジェクト 2014」を展開し、北陸地域づくり協会の皆様からも絶大なるご支援を頂き、広く発信することができました。

改めて御礼申し上げます。

ところで、昨年 6 月に品確法（公共工事の品質確保の促進に関する法律）、入契法（公共工事の入札及び契約の適正化の促進に関する法律）及び建設業法のいわゆる「担い手三法」が改正されました。

基本理念に、「将来にわたる公共工事の品質確保とその担い手の中長期的な育成・確保」が追加され、併せて発注者責務の明確化がされたところです。

北陸地方整備局として、この「担い手三法」の浸透と実現を強力に進めるため、「北陸ブロック発注者協議会」、「北陸地方公共工事契約制度運用連絡協議会」を両輪として推進するとともに、昨年 10 月に設置した、産官学で構成する「北陸建設界の担い手確保・育成推進協議会」も加え、三位一体で強力に展開していく所存です。

北陸地域づくり協会におかれては、災害に対する安全・安心に関わる防災講演会や専門的知識・技術の普及・伝承に関する技術講習会などの積極的な開催や、北陸地方整備局職員はもとより、北陸地方における建設界全体の技術力向上に貢献して頂き、心より感謝申し上げます。

結びに会員の皆様におかれましては、引き続き北陸地方整備局に対して一層のご支援とご助言を重ねてお願いいたすとともに、本年もご健勝でご活躍されますことをご祈念申し上げ、年頭のご挨拶とさせていただきます。



富山・石川県境部  
(H26. 10. 29 撮影)

人とモノの交差点－北陸の食の魅力を感じる－

たにもと わたる  
谷本 互

まち&むら研究所 代表



昭和33年 南砺市福光出身（現在 津幡町）。日本大学農獣医学部卒業、金沢大学大学院修了、財団法人 地域振興研究所常勤理事を経て、谷本互事務所（まち&むら研究所）代表。地創研 GM、金沢星稜大学、金沢大学、石川県立大学、高崎経済大学など講師歴任。発酵食品、農産加工、産業観光、宿泊施設などの分野が研究対象。

伝統的工芸品産地プロデューサー、温泉ソムリエ。七尾市での雇用創造事業、全国展開事業にアドバイザーとして加わる。著書に『日本酒の愉しみ』文春文庫共著、「原色うまいもの図鑑」北国新聞社出版部 監修共著などがある。

■北陸地方と食

人とモノの流れの中で付加価値が生まれる。素材、加工、流通、文化から北陸地方の食文化を考えていきたい。

北陸新幹線の金沢開業で北陸地方に関心の目が向けられることになる。その目的の一つに多様な「食」があるのではないかと考えられる。新鮮な食材があると加工しなくていいのではと思われるが、北陸地方では新鮮な素材を使い、保存性に優れ、素材の旨味を引き出した独特の加工品も数多い。

■サケとマス

素材そのものとともに、歴史や文化といった背景は大事である。素材に人がどのように関わってきたかである。例えばサケは川に上がってくる量が多いのは東北や北海道なのだが、孵化し放流する技術から余すことなく食べ尽くす料理の体系まで充実しているのは新潟県であろう。特に村上市や新潟市は有名であり、サケの調理メニュー、加工品も数多い。土産品でもある「サケ茶漬」も知られている。

マスになると富山市である。起源は神通川を遡上するサクラマスを使ったという、押しずしの「マス寿司」である。駅弁として有名になり、最近富山県内で広くつくられている。定番の丸いわっぱと笹で包んで、竹と太いゴムで押した容器は独特である。サケとマスの文化が息づいている。

■ブリと塩

ブリは「寒ブリ」として知られており、富山湾から能登半島にかけて各地でブランド化されている。贈答などに用いられる量も多く、刺身はもちろん、焼き物、煮物の「ブリ大根」、また「ブリしゃぶ」も注目である。



石川・富山の冬の味覚を代表する「かぶらずし」  
(写真提供：(株)ヨネダ・南砺市)

「かぶらずし」は石川県金沢市を中心とした加賀地域と富山県西部地域で主につくられている。現在はさらに広がっている。秋から冬の味覚である。かぶと麴とブリを挟んで漬ける。素材が混じり合い、甘、酸、旨味を發した味覚は癖になる。中にサバ入りのものもある。ニシンと大根の「大根鮓だいこんずし」もある。

かつて富山湾で獲れたブリは飛騨から松本に至り、塩蔵した保存品として各地の人を楽しめた。山と海をつなぐのは魚と塩である。

塩は内陸の人には貴重な品である。素材のブリに関心が向くが、素材としての奥能登の塩と船での流通を忘れてはならない。塩をつくる塩釜の製造で能登の穴水町中居が鋳物産地として發展したこと、鋳物職人を介して高岡銅器につながっていることも思い起こされる。

■カニとつながるおでん

カニ（ズワイガニ）は場所によりそれぞれ名称がつけられている。「ベニズワイ」は新潟県、富山県などを中心に上がる。糸魚川市の能生や射水市新湊の市場での赤いベニズワイガニが並ぶ姿は圧巻である。

石川県では「加能ガニ」、福井県では「越前ガニ」と呼ばれている。メスの甲箱（香箱）は

資源保護のため漁期が短い、冬の庶民の味として親しまれている。和食料理店できれいに身をほぐされて出てくる姿には人の温かさと手間を感じる。それをおでん種にした「カニ面」というものもある。



人の温かさが伝わる北陸独特のおでんだね「カニ面」(写真:「北陸物語」北陸経済連合会発行)

練り製品のかまぼこは各県で多彩である。富山の独特の昆布かまぼこ、赤巻、焼き入れ、タイなどの祝い品の創作かまぼこを含めて新潟から富山、石川、福井と多彩である。その他、ちくわ、いわゆる揚げ天ぷらなど種類も多い。昆布は富山市で消費量が多く、富山県内から隣県にかけて昆布かまぼこ、昆布<sup>メ</sup>、昆布巻きなどお惣菜として良く食べられている。

おでんの脇役だが欠かせないものにがんもどきと焼き豆腐がある。私も行きつけのおでん店でそのどちらかを必ず食べる。富山県南砺市と周辺では、かやく(具材)が入ったがんも(ひろうず)を「かやく丸山」という。アンパン状の中身を揚げ部分が包む構造で、出汁が滲みてうまい。

### ■保存食としての糠漬けなど

北陸地方でも戦前には新鮮な魚を食べられる人の数は限られていた。冷蔵庫が普及するのは生活燃料の革命が起きた昭和30年代半ば以降である。いまのように冷蔵が当たり前の時代ではなく、工夫をしていた。塩漬け、糠漬け、麴漬け、佃煮などが代表的である。加工される素材は川や沿岸の魚が主体で、そこに北前船で運ばれたニシンが加わる。

イワシ、サバ、ニシンの糠漬けは北陸地方一円でつくられている。特に「へしこ」は福井県を中心にした名称であり、広く福井県内に広がる。焼きサバも有名で、大野市では夏至から11日目の半夏生に食べる「半夏生さば」が風物詩となっている。

若狭地方を中心に焼きサバ寿司も出てきた。そういえば、魚の焼き方で新潟と福井は魚一本を焼いているのを見かけることが多いが、富山、石川は切り身が多いように見える。



半夏生の日に一匹丸ごと焼いた鯖を一人1本、家族全員が食べる風習がある。(写真提供:大野市企画総務部)

小浜市はサバ街道の起点で、今もサバが運ばれてきた途中の滋賀県朽木、終点となる京都の「サバ<sup>サシ</sup>鮓」は有名である。

イワシ、サバ、ニシンの糠漬け(こんか漬け)は石川県白山市の美川、金沢市の金石や大野も産地である。美川は手取川の河口に開かれた港町。北前船の寄港地でもあり、ここの特産が「フグ卵巣の糠漬け」である。猛毒のフグの卵巣が塩蔵と糠漬けによって食べられるようになる。



木樽に漬け込む糠漬け



豊富な伏流水(白山市美川の糠漬工場内)

実は隠れた大事な素材がある。それは白山からの豊富な伏流水である。魚を洗うのに使われる水は湧き水として各製造所に引き入れられている。自然と人の見事な接点を見るようである。

秋田で「しょつつる」(塩汁)、能登で「いしる」(魚汁)、香川で「いかなご醤油」。魚醬の一つ、いしる(いしり)が近年注目されている。イワシ、イカの他にメギスでもつくられている。新潟県内でもイワシの魚醬や新たに南蛮エビでつくられるものがある。伝統的な調味料として関心が高くなっている。

## 阪神・淡路大震災から 20 年 — 経済復興の社会技術の発達と展望 —

ながまつ しんご  
永松 伸吾

関西大学 社会安全学部 准教授



1972年、福岡県北九州市出身。中央大学法学部政治学科卒業。大阪大学大学院国際公共政策研究科博士前期課程終了、同博士後期課程退学。2001年10月大阪大学より博士(国際公共政策)を取得。大阪大学大学院国際公共政策研究科 文部科学教官助手、Asian Disaster Preparedness Center (ADPC) 客員研究員、財団法人阪神・淡路大震災記念協会人と防災未来センター専任研究員、独立行政法人 防災科学技術研究所 特別研究員を経て、2010年4月から現職。専門分野は公共政策(防災・減災・危機管理)・地域経済復興。著書に『減災政策論入門：巨大災害リスクのガバナンスと市場経済』(弘文堂発刊・2009年度日本公共政策学会著作賞)がある。

### 1. 阪神・淡路大震災からの 経済復興の問題

あの震災から早いもので20年が経過する。阪神・淡路大震災は、バブル経済崩壊後、日本経済成長が停滞し、まもなく本格的な人口減少を迎えようとする時期に発生した。

それまでのわが国においては、それなりの経済成長を謳歌しており、大きな災害が発生したとしても、そこからの復旧・復興過程はむしろ経済規模をより拡大するためのチャンスだったのである。

1990年代に入ってから、雲仙普賢岳の噴火災害や北海道南西沖地震津波災害の被災地では、災害前から人口減少が始まっていたこともあり、経済復興の困難さは認識されていた。しかし阪神・淡路大震災は、大都市においても経済復興が困難になるということが示されたという意味で、エポックメイキングな災害であったといえよう。

この災害における経済復興の困難さは、一つにはグローバル化の影響で、製造業が国外に移転したり、一端停止してしまったビジネスの需要が他の都市に奪われてしまったことなどが挙げられる。とりわけ、神戸港の需要は、シンガポールや釜山などの他都市に奪われ、回復しなかった。

これに加え、阪神・淡路大震災後、被災地では10万人を超える人口が一時に流出したといわれている。そのことは、被災地内部の需要に依存していた小売り・サービス業などについても復興を難しくした。

このように、阪神・淡路大震災からの経済復興の問題は、経済における需要の喪失だったのである。経済を復興させるためには、被災地内に需要を作り出すこと、そして雇用を生み出すことが何よりも求められたのである。

### 2. 中越地震における弁当プロジェクト

阪神・淡路大震災でもう一つ大きな問題となったのは大量の救援物資である。それらは円滑な災害対応を妨げただけではなく、無償で配布されることで地元でモノが売れなくなるといった地域経済への悪影響が懸念された。

2004年に発生した新潟県中越地震の被災地の一つである小千谷市では、「弁当プロジェクト」という興味深い活動がみられた。余震活動が活発であったこの地震では避難生活も長期化し、避難所への食事は主に新潟県が調達していた。水道が復旧した時期から、小千谷市では地元業者による弁当供給が行われた。鮮魚商組合を中心とする事業者が集まって、一部の業者の店舗は大規模半壊の認定を受けたにも関わらず、都

市ガスの復旧も行われていない中、業者間が連携して8,000もの弁当を製造し、避難所に提供することができた。それまで被災地の外部に流れていた需要が、地元の被災事業者のしごとになったわけである。そのうえ、被災者にとっては、できたての弁当が食べられるという、一石二鳥のプロジェクトであった。

その3年半後に発生した新潟県中越沖地震では、柏崎の鮮魚商組合が中心となって同様のプロジェクトを実施した。今度は避難所だけではなく、電力会社や水道会社の復旧作業員の食事も地元業者で提供することとなった。およそ1ヶ月間の間に、7万食以上の弁当を供給し、5,000万円を超える売り上げとなった。被災した事業者もこうした仕事があったおかげで、従業員の雇用を維持することができたのである。

弁当プロジェクトの意義は多面的である。筆者がもともと注目したのは、被災地の雇用維持や経済復興対策としてなのであるが、それ以外にも、こうした手法を事前に準備するということは、中小事業者の事業継続マネジメント（BCM）としての価値があることがわかってきた。中小事業者の多くは経営資源に余裕がなく、災害リスクを自社で分散することができない。だが、このように地域内の同業者が連携することによって、災害時の事業継続が可能になるケースは少なくない。さらに、柏崎では弁当プロジェクトをきっかけに、組合による共同受注や販売促進活動も盛んになったといい、災害時の連携が平時の経済活動にもプラスに作用したのである。

そして弁当プロジェクトのもう一つの価値は、そこで働く人々の生き甲斐や誇りを回復させたという点である。プロジェクトに関わった人々のほとんどは、お金のためというよりはむしろ、ふるさとを復興させたいという気持ちが強い。小千谷プロジェクトのリーダーたちは「義援金ももらったけれども、自分で稼いだお金の方が何倍も価値があるように思った」、「息子が跡を継ぐよと言ってくれた」と、プロジェクト

の意義を語っている。仕事を通じて被災地の復興に貢献できるということが、被災者の人間としての尊厳と誇りの回復になるということが、弁当プロジェクトから筆者が学んだ最も重要な点であった。



小千谷市の市場内に設置された  
仮設調理場での作業風景

### 3. 東日本大震災としごとの復興

2011年3月11日に発生した東日本大震災では、弁当プロジェクトのような、被災事業者による復興支援活動が組織的に行われたという事実は確認されていない。多くの被災地では社会基盤が根こそぎ破壊されて、事業を継続する前提が全く整っていなかったからである。

また、それゆえに被災地における雇用の問題は極めて深刻であった。震災による失業者は被災地だけで20万人に及ぶという試算も行われ、これらの震災失業者をどう支援するかということが重要な課題となった。

そこで、官民を挙げて被災者の雇用支援が行われた。震災対応や復旧・復興事業に被災者を雇用し、労働対価を支払うことによって被災者支援につなげるキャッシュ・フォー・ワーク（CFW）という言葉が注目を浴びて、実際にそうした活動に取り組む国際NGOも現れた。行政も、2008年のリーマン・ショック時に創設された緊急雇用創出事業を活用して、被災者の雇用創出に乗り出した。

東日本大震災では、ボランティアの参加者数が被災規模の割に少なかったと言われている。特に阪神・淡路大震災と比較すれば、被災地の物理的な広がりやアクセスの不便さ、被害の激甚さ、そして原発事故といった、慎重な対応が

要求される条件が重なったことなどがその背景にある。

こうしたボランティアの不足を埋めたのは、緊急雇用で働く被災者自身であった。地震当初の活動は、救援物資のマネジメントや、避難所の管理清掃業務、被災地の清掃業務、がれきの中のアルバムなどの回収業務など、まさしくボランティアがこれまで関わってきた部分であった。被災者が自分たちでこうした活動を担っていったということ、そしてそれが被災者の雇用になったということは、東日本大震災がもたらした災害対応の重要なイノベーションであったと思う。

#### 4. 民間企業による復興支援

東日本大震災のもう一つの特徴は、民間企業による復興支援が極めて大規模に実施されたと言いうことである。

むろん、これまで企業はCSR活動の一環として被災地の支援に取り組んできた。だが、東日本大震災においては、CSRではなく、その企業の本来業務や技術を通じて被災地の復興に貢献しようとする企業が非常に目立った。

例えば、HONDA社は、同社が開発したカーナビシステムによる通行履歴を速やかに公開し、行政情報よりも早く道路の啓開状況が明らかになった。Amazon社は、救援物資のミスマッチを解消するために、同社Webサイトのウィッシュリストを用いた支援マッチングを行った。Google社は、避難者名簿の写真を用いて被災地の安否確認に貢献した。加えて、原発事故により全町避難を余儀なくされている双葉町において、ストリートマップの機能を用いて立ち入り禁止区域の状況を町民らがWEB上で確認できるような支援を行っている。

#### 5. ソーシャル・ビジネスによる復興支援

これらの中で、特筆しておきたいのが、ミュージックセキュリティー株式会社による「セキュリテ被災地応援ファンド」\*1である。同社

は、もともとインディーズアーティストのCDデビューをクラウドファンディングの手法で支援することを目的に立ち上げられた企業である。実際の活動は、音楽活動支援に留まらず、純米酒の酒蔵の支援など、銀行からの資金調達が難しく、それでいて一般の共感を呼ぶような事業に対して、一般投資家から広く小口投資を集めている。

同社が震災後に行った「セキュリテ被災地応援ファンド」とは、被災事業者が事業計画をWEB上に公開し、投資家はそれらの事業計画を参考にしながら、応援したい事業者に直接投資ができる仕組みである。一口1万500円で、内訳は出資金5,000円と寄付金5,000円、販売手数料500円となっており、手数料を除き全額個別事業者の事業に活用されるが、寄付金部分については投資家への返済義務はない。

この応援ファンドは、本稿執筆時点で1億円を超える資金を、約2万9000人の参加者から集めることに成功している。セキュリテ応援ファンドへの出資者は経済的なリターンを望んで投資しているわけではなく、純粋に被災地の復興を望む人々が多い。このため、同社は投資説明会や、投資先を訪問するファンドツアー、出資者らによるファンミーティングなど、オフラインの交流企画も積極的に実施している。



セキュリテ応援ファンドのウェブサイト

もう一つ紹介しておきたいのは、株式会社SEELS (Social Enterprise English Learning School)\*2である。三陸沿岸部には、フィリピンをはじめとする東南アジアや南米から漁業者に嫁いできた女性たちが多数存在していた。彼



女たちの多くは、水産加工などの仕事に従事していたが、こうした職場の多くは津波で流され、社会保険も持たない彼女らにとって雇用の場の確保は大きな課題であった。また、日本人家庭に嫁いできた彼女らは、日本人社会に同化することを求められているケースが多く、日本語の教育も十分に受けてこなかった上に、同じ国籍を持つ仲間同士で交流すること自体にも批判的な目が向けられるケースも少なくなかった。経済的な問題だけではなく、彼女たちが外国人として自らの地位を高めていくことも重要な復興の課題であった。

SEELS は、こうした外国籍の女性達を英語の教師として教育し、地域の中で英会話教室を開き、日本人の子どもたちに英語教育を行っている。子どもたちにとっては、先生はその地域コミュニティの一員であり、先生と生徒の間に長期的な関係が築けるばかりか、地域のニーズに合った英語教育を展開することも可能になっているという。現在、岩手で2教室、宮城で2教室、福島で3教室を開校している。

こうした、社会的課題の解決にビジネス的手法を用いたものは「ソーシャル・ビジネス」と呼ばれており、これ以外にも多数のプロジェクトが展開されている。ソーシャル・ビジネスの台頭もまた東日本大震災の特徴の一つであると言って良いだろう。被災地の人々が、被災地の復興のために自ら働き収入を得ることは、持続可能な地域の復興にとって不可欠である。ソーシャル・ビジネスは、まさにそうした持続可能な地域復興を可能にする力を秘めている。

## 6. 起業支援と被災地復興：

### ニューオリンズの例

雇用創出という観点からは、必ずしもソーシャルビジネスである必要はない。ここで米国のニューオリンズのNPO「アイデアヴィレッジ」\*3を紹介したい。このNPOは、「ニューオリンズを起業家のまちにする」ことを目的として設立された。彼らの主要な活動は、起業のた

めのアイデアを持った人々によるミーティングを開催し、起業したい人らのネットワークを構築することである。そうした人々の関係性による相乗効果によって、様々なビジネスが立ち上がっている。そして、スポンサーにはイベリア銀行、JPモルガンといった金融機関や投資会社も関わっており、優良な事業者を資金面でサポートしている。2005年のハリケーンカトリナによる浸水被害は激甚であったが、その後の復興過程でニューオリンズにおける人口当たりの起業率は、全米の平均を大きく上回るまでに成長している。

例えば、ある事業者は、市内のコインパーキングの利用時間の延長を、スマートフォンから遠隔で行うアプリケーションを開発し、そのサービスを利用する駐車場をニューオリンズ市内に拡大しようとしている。このビジネスは、それが拡大することで市民の利便性の向上につながるし、またそのことがニューオリンズという都市そのものの魅力の向上に貢献しているのである。

被災地の産業復興は、これまで行政が将来性のある成長産業を特定し、そこに重点的に支援するというのがお決まりのパターンであった。しかし、これだけ変化の激しい時代において、何が復興に役に立つか、そうでないかを我々は事前には知ることはできない。現在過疎に悩む地域が未来永劫そうであるというのも思い込みに過ぎないかもしれない。先入観にとらわれず、若者が自由なアイデアで復興に取り組めるような制度的基盤がこれからの復興には求められるだろう。

\*1 セキュリテ被災地応援ファンドのウェブサイトは下記。<http://oen.securite.jp/>

\*2 同社のウェブサイトには事業内容が紹介されている。同社は経済産業省の「東日本大震災復興ソーシャルビジネス創出促進事業（新事業創出促進事業）」にも採択されている。<http://www.seels.jp/>

\*3 同団体のWEBサイトは以下である。<http://ideavillage.org/>

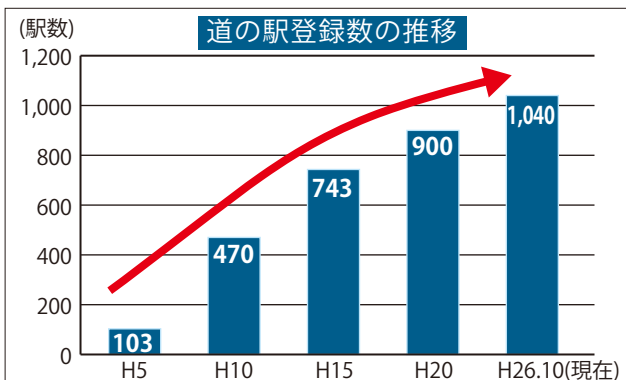
# 特集「地域とともに」

## 「地域の笑顔を支える道の駅」

### 道の駅 瀬替えの郷せんだ

#### ■地方創生の拠点として脚光を浴びる道の駅

線路に駅があるように、一般道路にも駅を。そんな発想から生まれた「道の駅」。1993年4月に旧建設省と地方自治体の協力で、全国で103箇所が登録されたのを皮切りに、登録数は増え続け20年たった現在、その数は1,040駅となっている。



その間、ドライバーが立ち寄る休憩施設から、道の駅自体が目的地となり、まちの特産物や観光資源を活かしてひとを呼び、地域にしごとを生み出す核へと独自の進化を遂げ始めている。

冬は3メートルを超える雪に覆われる道の駅を訪ねてみた。



地域のマネジメントを担う道の駅「瀬替えの郷せんだ」

#### ■交流型から地域支援型に移行

国道252号、道の駅「瀬替え<sup>\*1</sup>の郷せんだ」は、標高150m～500mの間で沢と山が連続する起伏に富んだ地にある。先人たちが渋海川の蛇行を埋め立て、田んぼをつくり暮らしてきた仙田

地区<sup>\*2</sup>の中心で、この地形と暮らしを活かした「仙田体験交流館」を中心施設として、2000年に開設された。当初は、住民たちが講師になり「そば打ち体験」、「山菜とり」、「川下り」などの事業を行い、都市部との交流で地区の活性化を図ろうと四季を通して数々のイベントが開催された。

仙田地区で採れる新鮮な農産物や特産品を販売する直売所「楽楽市場」は、外部から訪れる人に喜ばれ大勢の人が立ち寄り、農家の励みになっていた。

しかし、住民の高齢化が進み、自ら体験講座を企画・運営する事が難しくなり、規模を縮小せざるを得なくなってきた。それに伴い、当初、年間10万人あった利用客は2010年頃には3万人までに減少していた。また、コミュニティから取り残されている高齢者の存在が問題になってきた。

\*1 新しく河道を掘削して、河川を付け替える工事

\*2 仙田地区は、現在は9集落、約700人が暮らしている。高齢化率は55%

#### ■高齢者の買い物を支える「あいmart」

耕作が困難になった農家への支援だけでなく、高齢化したこの地区の生活支援を行う組織が必要だとして、有志が集まり2010年に株式会社あいポート仙田が設立され、道の駅の指定管理者になった。

駅長をつとめる長谷川 東さんは「この道の駅は、最初の10年は外に向かって整備を進めてきたが、これからは、地域住民の暮らしをサポートし、地域マネジメントの核となる道の駅を整備していこうということになった。地区にあったAコープの店舗が閉鎖されてからは、高齢者の買い物難民が発生し、正月にトイレの電球が切れ十日町市街地までタクシーで買いに行った」という笑い話にもならない現実があったと当時を振り返る。

早速、買い物難民の解消に向けて動き、直売所と日用品販売を併せもった「あいマート」をオープンさせた。地域の買い物客が増えたこともあり、年間利用者は、5万人近くに回復している。道の駅が一番賑わう収穫祭には、2,000人の集客があった。



観光客だけでなく地域の高齢者が利用する「あいマート」

### ■高齢者の交流の場に

「もともとこの地区は強いコミュニティで支えられていた。しかし、地域を担う若い層が少なくなりそれも困難になってきた。農作業をやめてしまうと全くコミュニティに関わらない人が出て来る。そんな状況が生まれないう、地区の高齢者の皆さんのサロンの活動を行っている。毎週土曜日と、隔週金曜に希望者の自宅へマイクロバスで迎えに行き、一日道の駅でゆっくりと楽しく過ごしていただく」と今、一番力を入れている事業だという。

参加している70代から90代の女性の方々にお話を伺うと、かつてこの地域にあった縫製工場でいっしょに働いていた時の思い出話、春になったらどこに桜を見に行こうかなど話題は尽きずあつという間に時間が過ぎるといふ。

「工場があった頃はこの集落にお嫁さんの来ては多く、どこの家からも子供の声が聞こえた」、「子供の学資にと工場で働いたのに都市部に就職して戻ってこなかった」というお話から、この地区の歴史を垣間見ることができた。



「ここに来れば仲間に会える」という安心感を生み出している道の駅

### ■企業のCSR活動に期待

駅長にこれから始めたいことを尋ねると「都会に引けを取らない給料で働ける仕事をつくりたい。この地区に若者が定住できる企業が必要だ。企業の社会貢献、社会的責任が言われている。大企業には、ぜひ日本の大きな課題である過疎、高齢化問題の解決のために、これまで培ってきたノウハウを提供し、この地区のブランド企業創出に力をかしてもらえるよう働きかけたい」と地域マネージャーとしての構想を語ってくれた。

今、地方創生の拠点として脚光を浴びる道の駅だが、「地域のバックボーンを考え、将来を見据えた、身の丈にあった計画」という言葉が心に残った。



瀬替えの郷 仙田地区全景

### 取材協力：道の駅「瀬替えの郷せんだ」

新潟県十日町市中仙田甲 826

TEL:025-761-2008

ホームページ:

<http://www6.ocn.ne.jp/~kirari21/>

## 若手アーティストと地域をデザイン

studio こぐま（山形県小国町）

少子化、過疎化に伴い、毎年、全国に廃校が発生している。

山形県小国町で閉校された校舎を工房に制作活動を行う若手アーティストが地域の活性化に一役かっている。studio こぐまの皆さんからお話を伺った。



錦繡の飯豊連峰をバックに建つ旧小玉川小中学校  
(撮影：大沼 洋美)

### ■旧小玉川小中学校を地域の交流施設に

小国町は、山形県の南西部、新潟県と県境に位置し、両県の県庁所在地、山形市と新潟市のほぼ中間地点にある。磐梯朝日国立公園に属する朝日連峰、飯豊連峰という雄大な山並みに包まれ、ブナの森をはじめ、町全体に落葉広葉樹林が広がっている。小玉川地域は飯豊山の登山口、マタギの集落としても有名だ。

冬は積雪が4mを超えることもある小玉川地域は人口の流出が続き、平成20年3月に小玉川小中学校は閉校された。この地域の活動を行う中心であった学校は、子供たちが勉強するだけの場ではなく、地域の祭りなども行われてきた。そのため閉校により地域コミュニティを維持できなくなるのではないかとの不安から、地区住民からなる「小玉川小中学校閉校後利活用方策検討委員会」をつくり、校舎の利活用について何度もワークショップを開き話し合った。その結果、地域交流施設として保存することになり、マタギの研究などで交流のあった東北芸術工科大学（山形県山形市）と連携して取り組むことになった。

### ■空き校舎でアーティスト活動がスタート

平成23年5月、東北芸術工科大学を卒業した3名のアーティストが、空き校舎をアトリエとして「studio こぐま」というグループ名で制作活動をスタートした。

自分たちの特技を活かし、毎月行う「大人のデッサン教室」、「大人の水彩画教室」、「オープンアトリエ」、グループで企画する「アーティスト・イン・レジデンス」などのイベントの開催、地域のお祭りなどにも参加、協力し地域住民との交流を深めている。

中でも地元の収穫祭「かつきり祭」と合わせて行う「芸術の収穫祭かつきりまつり」には、町内外からの作品が展示され多くの人々が訪れる。旧校舎を舞台に秋の1ページを彩るイベントに出かけてみた。



「小玉川の人々」  
(大沼 洋美)



廊下、教室に作品が  
展示され校舎が美術館に

校舎に入ると美術館のように整然と作品が展示されていた。ゆっくりと作品を見て回っているうちに学校時代の思い出がよみがえり、タイムスリップしたような気持ちになった。

2階へ向かうと踊り場に、小玉川の人たちの暮らしぶり、これまで刻んできた歴史までが伝わってくるような写真が展示されていた。

## ■小玉川の自然と人が織りなす作品

「studio こぐま」の代表で、踊り場にあった写真の作者である大沼 <sup>おおぬま ひろみ</sup> 洋美さんは、大学の情報デザイン学科映像コースを卒業し、大学で助手などを務めた後、小玉川で活動を始めた。

「これまで人をモチーフに写真を撮ったことがなかった。しかし雄大な自然に囲まれると人の存在が浮かび上がってくる。まだ撮影していない方々の写真を少しずつ増やしていきたい」と、ここで暮らすようになってから創作の対象が大きく変わったようだ。



左から塩崎 あゆみさん、船山 寛子さん、大沼 洋美さん

<sup>ふなやま ひろこ</sup> 船山 寛子さんと <sup>しおざき</sup> 塩崎 あゆみさんは、昨年4月からここでの活動を始めたばかりだ。

船山さんは、大学院でアニメーションを学び、学生時代から作家として活躍している。「家の中に閉じこもり作品づくりに没頭していた暮らしから、里芋づくり、稲刈りなどを地元の人から教わり、育った野菜を使い食事をつくる生活が加わった。地域の伝統であるマタギを守り、日々の暮らしを大切に生きていく人々に出会い、これまで知らなかった多くのことを学んだ。毎日が感動の連続だった」とここでの生活を楽しんでいる。

塩崎さんは、大学時代から、「studio こぐま」の活動に興味を持ち、イベントに参加していた。大学では版画を学び、この地域で暮らす人たちにもっと芸術に興味を持ってもらえればと10月から「年賀状を木版画で作りませんか」を開催した。「過疎の進むこの地域で、芸術にかかわる活動がどのように実を結ぶのか」と考えている。

## ■「こぐま」から大人のくまに

「地元の人にはいつも困ったことがないか気にかけてもらっている。その気持ちに応えるためにも、まず工房を気軽に地域の方が訪ねアーティストの活動を見てもらえる場所にし、将来的には芸術、文化の拠点にしていきたい」と力を込める。

毎月、活動内容を「こぐま通信」として地区内外に情報発信し、声援を送ってくれる人も増えている。



残雪と新緑のコントラストが美しい小玉川。建物は旧小玉川小中学校背面（撮影：大沼 洋美）

グループ名「こぐま」は、若手アーティストである自分たちをまだ成熟していないクマに例えつけられた。小国町はこれまで5人のアーティストを受け入れている。既に2人がここでの制作活動を卒業したが、引き続き応援してくれている。

地域の人々は、彼らが小国の自然、人、文化の中で成長し、小玉川の伝統を引き継ぎつつ、新しい文化を築いていってくれることを願っている。

「芸術の収穫祭かっきりまつり」が終わると、小玉川に一気に冬がやってくる。真っ白な雪が加わった自然の中で、3人の制作活動は本格化する。

### 取材協力：studio こぐま

山形県西置賜郡小国町大字小玉川 511  
旧小玉川小中学校

ホームページ：  
<http://studiokoguma.tumblr.com>

## ねずみ大根とおしぼりうどん（長野県坂城町）

長野県坂城町に、首より下がふくれ、根の先にねずみの尻尾のようなものが伸びる辛味大根がある。

その形から「ねずみ大根」と呼ばれ、古くから地大根として栽培され、「おしぼりうどん」のつけ汁として使われてきた。



11月中頃から2月頃まで店頭に並ぶ「ねずみ大根」。肉質は緻密で硬く汁が少なく、舌触りが良い



ねずみ大根の「あまもっくら」として味を活かした「おしぼりうどん」



### ■ 「ねずみ大根」の生育に適した土地

坂城町ねずみ大根振興協議会の会長を務める山崎進一さん（76）は、「ねずみ大根は『鍬で耕せば、火花が出るような小石混じりの畑』が適しているとされ、年間降水量が少ない坂城町は最適地。違う場所ではねずみ大根本来の形に育たない。

しかし自家採取を繰り返すうちに下ぶくれの形からはずれた大根が出てきた。これでは伝統ある種を守られないという危機感から農業委員に相談し、平成11年に坂城町ねずみ大根振興協議会を立ち上げ保存に取り組むことになった」と話す。

その後、長野県野菜花き試験場の協力を得て、選抜して育成された「からねずみ」を平成13年にF1品種登録し「ねずみ大根」として栽培することになった。平成19年には、『信州の伝統野菜』に認定され町の特産品として定着してきた。



重さ250～300g程度、手の平にのるほどの大きさの「ねずみ大根」。まるでねずみが遊んでいるように見え愛らしい。

### ■ 寒さから身を守り「あまもっくら」

「農業は天気左右される。特に種蒔きの日を決めるのは、その後の生育に影響してくるので神経を使う。雨が少なく畑が乾燥していると種と薬剤がうまく混じらず表面の皮を害虫にかじられてしまう。霜が降る前にねずみ大根本来の大きさまで育て収穫を終えなければならない。逆算すると、8月25日から10日間になる。

台風が来る時期とも重なるので毎日、天気予報と首っ引きで考えている」と生産の苦勞を笑顔で語る。



山崎会長が小学校で行う体験授業は子供たちに人気だ

11月になるとねずみ大根自身が寒さから身を守るため、大根内部に養分を蓄える。そのため、辛さ以外に甘味を伴う奥行きのある味になる。これを坂城町では「あまもっくら」と言い、「おしぼりうどん」の味を表現する時に使われる。

## ■晩酌の後は「おしぼりうどん」

ねずみ大根のおろしを布巾やガーゼなどで絞ることから「おしぼり」の名がついたと言われる「おしぼりうどん」。大根の絞り汁に味噌のほか、ネギ、かつおぶし、クルミなどの薬味を好みで入れ、釜揚げうどんをその汁に浸けて食べるシンプルな料理だ。大根本来の辛味は、すりおろして20分ほどでなくなってしまうので、食べる直前に手早くおろすのが身上だ。

週に2～3回はおしぼりうどんを召し上がるという山崎会長は「辛さが口の中に広がり、だんだん体が温まってくる。お酒を飲んだ後に食べると胃がすっきりしていいね」と、地元では晩酌の後におしぼりうどんという男性が多いようだ。

## ■町の観光大使「ねずこん」

協議会では、「ねずみ大根」、「おしぼりうどん」をもっと知ってもらおうとねずみ大根が収穫される晩秋、「ねずみ大根まつり」を開催し、収穫体験、おしぼりうどんの振る舞いを行っている。それに併せ加盟店は「おしぼりうどん」スタンプラリーキャンペーンを実施している。



毎年、11月中旬頃に行われる収穫体験には大勢の人が参加する

町内にある3つの小学校と協力し、授業でねずみ大根の栽培を教えている。「子供たちは外での授業が楽しいこともあり、草刈り、水やりも一生懸命やってくれている。大根の収穫の時は大声を上げて喜んでいる。この体験をとおして町の伝統野菜を身近に感じ、守り継ごうという気持ちが育ってくれれば」と願っている。

ねずみ大根のブランド化を図るため、マスコットキャラクターをつくり、名前は公募で「ねずこん」に決定した。町のシンボルキャラクターとしても活躍中で、バス、石油タンク、ストラップなどのグッズと、町の至るところで「ねずこん」に出会う。

ねずみ大根の加工品として焼酎、ドレッシングなども開発されている。

生産者、町、商店、企業、学校などがいっしょになり地域資源「ねずみ大根」を全国に発信していこうという取り組みは郷土愛を育み、坂城町の魅力アップにつながっていくだろう。



ねずみ大根マスコットキャラクター「ねずこん」



石油タンクに描かれた「ねずこん」がお出迎え

取材協力：  
坂城町ねずみ大根振興協議会 事務局

ホームページ：<http://nezumi-daikon.com/>  
TEL:0268-82-3111  
長野県埴科郡坂城町大字坂城 10050 番地  
坂城町役場 産業振興課内

## 会員だより

「平成26年秋の叙勲」で、栄えある勲章を4名の会員の方が受章されました。長年のご功績が顕彰されたものであり、心からお祝い申し上げます。皆様からご寄稿頂きました。

### 瑞宝中綬章

日月 俊昭氏

(東京都杉並区在住)

元北陸地方建設局  
局長



### 記憶に残る小さな出来事

このたび、叙勲を受けることができました。皆様方から頂きましたご指導とご鞭撻の賜物と深く感謝いたしております。

国家公務員として31年間、その後財団勤務2年間、民営化を含め首都高速道路で10年間と公的な分野に43年間勤めました。国家公務員の時は運輸省、海外経済協力基金(現在の国際協力銀行に移行)、日本道路公団、広島県の4組織に出向しました。

何年たっても印象深く想い出すことは、現場の出来事です。入省して2年目に監督官付きの現場監督に配置されました。バイパスの工事現場で、鉄筋検査や型枠の出来具合や締固めの確認など、来る日も来る日も地道にとりくみましたが、この時の現場の炊き出し食堂での昼飯は格別でした。

工事事務所の課長時代にはこんなこともありました。沿道に家屋が密集している高架橋の騒音振動などの被害問題で、工事に強く反対している町内会の役員会に何度も出向きました。ある晩、厳しいやり取りが特に長引き、今晚はもう駄目だとあきらめ、正座を崩し立ち上がりかけたところで足が攣り、足の甲を捻挫して歩けなくなりました。その後、松葉杖で地元を訪れたところ、まさしく「怪我の功名」で意外にも工事を承を得ました。小さな出来事なのですが、記憶に深くしみこんでいます。

後年、冷えがきついと疼くこともあるのですが、この程度で済んでよかったなあ、とその度

毎に思います。巨大プロジェクトや新たな政策的なことや複雑怪奇な議会調整・業界対応などに携わり、中小の災害に遭遇したことも数多いのですが、思いだして心地よいのは、五感や身体で感じとった現場での出来事です。他の人からみればとても些細なことなのでしょうが、歳を重ねるにつれ、現場で対応した些細なことも含めさまざまなことを思い出します。

北陸地建の勤務は1年9ヶ月でしたが、父母の出身地が金沢だったので、初勤務のような気がしませんでした。小学校時代には夏休みに何度か金沢にゆき、真っ青な金石の海での海水浴や内灘の砂浜に残存していた熱暑の鉄板道路を歩いたことが懐かしい思い出です。法事や葬儀で、勤務地の広島や東京から夜行で雪の金沢にかけつけたことも印象深いものでした。

北陸地建着任早々「橋本行革」の突風が吹き、各県の知事・議会・市町村会・経済界などを奔走し、このときは内政のほとんどを部長に任せました。行革は現在進行形なのでふれることは差し控えますが、現役の方々の仕事を通しての奮闘に頭の下がる思いです。

新潟・佐渡の集中豪雨の災害に遭遇しましたが、県・市町村の被害が大きく直轄は応援する立場でした。宇奈月ダムの本体工事や大河津分水洗堰の改築工事の最盛期であり活気に満ちていました。高規格幹線道路は立ち上がりの時期であり、局部的な反対はありましたが、全体的には推進体制を整える段階でした。着任して半年後に発想し、直ちに実施に移した富山の防災センターを1年後に開所式にこぎつけ、卒業しました。

公務員生活の最後を、厳しくも美しい北陸の地において、勤勉で粘り強い人々と一緒に仕事のできたことに、幸せと感謝の気持ちで一杯です。誠にありがとうございました。



## 瑞宝中綬章

山田 俊郎 氏  
(東京都目黒区在住)

元北陸地方建設局  
企画部長



### こいつぁ春から縁起が良いわい

平成 26 年秋の叙勲で瑞宝章受章の栄に浴し、喜びの気持ちで一杯です。これもひとえに皆様方から賜りました暖かいご指導ご厚情のおかげと心から感謝申し上げます。

今年は春からいいことづくめでした。

江戸千家の直門である長男に連れられて出かけた初釜で、「瑞色新」と書かれた家元の書を福引で引き当てたのです。大勢のお弟子さんが来られている中で門外漢の私が当ててしまい、申し訳ない気持ちで一杯でした。(なお、この書には偶然にも「瑞」の字があり、瑞宝章を暗示していたかのようでもあります。)

次は三男が仕事としている大和花道会の新年会の福引でとても大きな花瓶を当てたのです。同席していたこれを焼いた陶芸家から「我ながらいい出来栄えなので大事に使っていただければありがたい」と言われましたが、私にこの器を使う才能はなく三男に使ってもらうことにしたところ、4月に開催された目黒雅叙園の「いけばな×百段階段」でこの花器を使い、清方の間を桜で満開にさせてくれました。

その次は家内が行きたがっていたスペイン旅行です。家内の写真を胸に偲ばせて4月下旬に

出かけましたが、ツアーの参加者は9名で、私以外は全員30代から50代の女性。添乗員も女性でした。ひとり仲間外れになるのではとの心配もどこへやら、スペインに着いたその日から皆さんと打ち解けることができ、おかげで和気藹々の楽しい9日間になりましたし、ちょっとしたハーレム気分を味わうことができました。

そして今回の叙勲です。まさに「こいつぁ春から縁起が良いわい」です。子供たちも喜んでくれてお祝いの会を開いてくれましたが、その場に家内の遺影が飾られてあったのには嬉しくて涙がにじんでしまいました。

北陸には平成4年4月から翌5年6月までの短い期間でした。初めての単身赴任ということでやや不安でもありましたが、幸い周りの方たちに助けられて楽しく仕事ことができました。当時は日米建設協議や埼玉土曜会事件等を受けて、入札契約方式が指名競争から一般競争へと舵が切れようとしていた時代で、入札契約のあり方について、内部での議論は勿論、県の関係者や、業界の方、そして業界紙の方との意見交換も盛んだった記憶があります。

退職後世話になった会社が北陸の仕事をする機会があったため、局や現場に何度か足を運びました。私の故郷である白河とつながる国道289号の5号トンネルや、照査技術者に名前を連ねた下新川海岸生地鼻の有脚式突堤には良く行きました。これからもOB会やゴルフ会など、機会があれば出かけていくつもりですので、引き続きよろしくお願ひします。



## 瑞宝小綬章

小林 英昭 氏

(神奈川県鎌倉市在住)

元北陸地方建設局  
河川工事課長



### お 礼

松本駅に降り立ったのは、昭和46年の春と  
はいえ桜もまだ蕾の4月初めのことでした。

私の建設省での第一歩は松本砂防工事事務所  
調査課です。

その後、立山砂防工事事務所調査課、本局河  
川計画課、金沢工事事務所調査第一課、そして  
また本局河川計画課・河川工事課と約10年間、  
北陸地方建設局でお世話になりました。

この間、多くの方々のご支援・ご協力・ご指  
導を賜りながら、仕事のやり方、社会人として  
の言動等を勉強させていただきました。

着任早々、青焼きの作業、すなわち第2原図  
の作り方、青焼き本番そして焼き上がった大き  
な青焼き図面の折り方等の手ほどきを教えてい

たいただきましたが、うまく行かなく難儀したこ  
とが昨日のように思い出されます。

仕事については勿論のことですが、仕事が終わ  
った後は苦手なお酒の方も随分と鍛えられま  
した。お陰さまでなんとか人並み近くまでにな  
ることができました。

最近では年齢に反比例して量は徐々に減りつ  
つありますが、白山浦界限など勤務した街々の風  
情が懐かしいです。

何やかやとこの約10年間に教えていただいた事  
が、その後の私の業務遂行の指針・礎となり  
ました。

北陸地建での勉強や経験は現在も私の貴重な  
財産です。

公私に亘っての出来事も、楽しかったことは  
楽しい思い出となって心に残り、難題に遭遇し  
て頭を痛めたことは、今となっては時間と共に  
風化して懐かしい思い出です。

楽しくかつ充実した北陸地建での生活を過ご  
すことができました。

大変お世話になり有り難うございました。

## 「北陸地域の活性化」に関する研究助成事業 募集中 【募集期間】平成26年12月1日(月)～平成27年2月2日(月)

(一社)北陸地域づくり協会は、地域に住む人々の英知や発想を活かした多様な研究や活動を支援することにより、地域の自立と活性化を促進する目的で、平成7年度から「北陸地域の活性化」に関する研究助成事業を行っています。平成27年度も引き続き事業を実施します。

今回の募集では、「地域づくり研究事業」、「技術開発支援事業①技術開発」の助成予定数を大幅に増やしました。

また、「技術開発支援事業②共同研究」の実施体制の条件を緩和し、「北陸地域に所在する大学もしくは高専を含む2つ以上の機関」にしました。

詳細は、協会ホームページ (<http://www2.hokurikutei.or.jp/>) のトップページ「お知らせ」2014年12月1日をご覧ください。皆様のご応募をお待ちしております。

助成事業名	助成対象	助成金 (単位:万円)	19回 助成数	20回助成 予定数	審査
地域づくり研究事業	NPO 任意団体等	20～50	9	12	書類審査
技術開発支援事業	①技術開発 企業・大学 法人・個人	20～50	2	3	書類審査
	②共同研究 大学もしくは高専を 含む2つ以上の機関	200～300	2	2	書類審査 プレゼンテーション

※助成数は増減することがあります

## 瑞宝双光章

福田 伸宏 氏

(新潟市江南区在住)

元北陸地方建設局  
企画部 技術調整管理官



### 思いで

このたび、平成26年秋の叙勲で受章の栄に浴しました。

11月13日に国土交通大臣から勲記・勲章の伝達を受け、その後、皇居において天皇陛下に拝謁しお言葉を戴きました。当日の天候は、雲ひとつない日本晴れに恵まれて、参列者の皆様の顔も輝いていました。その中に加わることが出来たことは、先輩・同僚をはじめ周りの皆様に支えて頂いたお陰と心から感謝しております。

私は、昭和31年に当時の中部地建の石川工事事務所に採用されました。

最初に就いた仕事は、国道8号の金沢市森本町地先から津幡町に向かったのコンクリート舗装工場の現場でした。当時は、直営工事が主流で、初めての請負工事でしたから見学に多くの方が来られました。

私の担当は、平板載荷試験による路盤の支持力測定と仮設のコンクリートプラントでのスランプ測定とテストピースの作製でしたが、平板載荷試験を多く実施することで、転圧しているローラの脇を歩きながら、路盤の沈下量(たわみ量)を目視することで、およその支持力を予測することが出来るようになり、現場の楽しさを知ることが出来ました。

次に、北陸地建となった企画室に配置替となり、管内の技術者を対象にした研修会の実施のことです。それは研修会場を探すことから始まり、研修日程、研修内容、講師の依頼、テキストの作成と続き、宿泊場所の確保も必要で、施設を借りてそこに貸し布団を運び込み宿泊所としたことです。

技術者研修の総てを手作りで行ったことで、講師の方と打合せを重ねることで内容の充実したものとなりました。また、研修に参加された方とは、いろいろな要望を含め細かな打合せを行うことで親しくなることが出来ました。

その後、昭和38年に道路計画に替わり、全国国道走行速度調査に参加したことです。調査の内容は、全国の主要な国道を実際に走行するもので、予めチェックポイント(主要交差点等)を決めておいて、乗用車とトラックを使って昼間と夜間に分けて、区間ごとの時間と距離及び交差点の数、信号機の数、対向車の数、カーブの数等を計測するものでした。区間ごとの道路幅員、路面状況、市街地・郊外別、鉄道との平面交差数など、走行条件に影響するものを別に作製しておいて、それらを重ね合わせて国道の走行速度の現況を把握するもので、全国の主要な国道を同時に調査しました。

北陸地建では、管内の国道7号・8号の全線を調査の対象としました。当時は、7号の葡萄峠及び8号の曾地峠は、カーブが多く砂利道でした。また、直江津から富山県境にかけては、砂利道で大型車のすれ違いに時間を要する箇所が数多くありました。

結果として、道路幅員、路面状況、道路線形等が、如何に大切か知ることとなりました。当時の道路事情を知るものにとっては、現在は夢のような道路状況に変化しています。

このように、採用当時からのことに思いをめぐらす機会を与えて頂いたことに、深く感謝しております。これからも良い思い出を作りたいと思っていますので、宜しくお願い致します。

4名の方の官職は北陸地方建設局在職時のものです。

# 伝言板

(一社)北陸地域づくり協会が主催、共済、後援等で行う一般参加型事業です。  
お時間をみつけ、ぜひお立寄りください。

イベント名	期 日	開催地・会場	内 容	問合せ先
平成 26 年度 「防災ボランティア 週間」防災講演会	1月19日(月) 15:00～17:15	新潟東映ホテル 2F「朱鷺の間」 定員 120 名	講演① 「教訓を伝えて活かすまちづくり ～広島土砂災害を踏まえて～」 講師／石川 俊之 氏 国土交通省北陸地方整備局 企画部 事業調整官 講演② 「大地震への備えと対応 ～新しい制度展開を踏まえて～」 講師／中林 一樹 氏 (公社)中越防災安全推進機構 理事長	北陸地域づくり協会 企画部 TEL:025-381-1160 締切:1月7日(水)
ゆきみらい 2015 in 長岡	1月29日(木) ～1月30日(金)	アオーレ長岡	■シンポジウム(29日) ■研究発表会(30日) ■見本市(29日～30日) ■除雪機械展示会(29日～30日) ■交流会(29日) ※シンポジウム、研究発表会、交 流会は事前受付が必要	ゆきみらい 2015 in 長岡 実行委員会事務局 (北陸地方整備局 企画部 広域計画課) TEL:025-370-6687 HP:http://www.hrr. mlit.go.jp/yuki/2015
第 11 回 社会資本整備 セミナー	1月23日(金) 13:30～16:00	新潟県建設会館 定員 200 名	講演① 「最近の国土交通行政の 取り組みについて」 講師／北陸地方整備局 担当官	社会資本整備セミナー 事務局(北陸地域づく り協会 技術部) TEL:025-381-1882 締切:1月16日(金)
	1月26日(月) 13:30～16:00	石川県地場産業振興 センター 定員 150 名	講演② 「災害と社会資本整備」 講師／大川 秀雄 氏 放送大学新潟学習センター 客員教授(新潟大学名誉教授)	
	1月27日(火) 9:30～12:00	ボルファートとやま 定員 100 名		
	2月6日(金) 13:30～16:00	長野バスターミナル 会館 定員 80 名		
南砺・そば祭り	2月6日(金) ～2月8日(日)	利賀国際キャン プ場周辺(南砺市利賀 村上百瀬)	利賀特産そば粉を使用した手打ち そばや岩魚の塩焼き、五平餅などを 味わい、伝統行事「丑曳き」、民謡、 雪夜の花火ショーなどが楽しめる	南砺利賀そば祭り実行 委員会(南砺市利賀行 政センター) TEL:0763-68-2111
「北陸地域の活性 化」に関する研究 助成事業報告会	3月13日(金) 13:30～17:15	チサンホテル新潟 (新潟駅南口直結) 定員 120 名	第 19 回「北陸地域の活性化」に 関する研究助成事業、13 課題の成 果報告	北陸地域づくり協会 企画部 TEL:025-381-1160

## 編集後記

いよいよ3月14日に北陸新幹線が開業します。首都圏から北陸がぐっと身近になります。随想を読み、初めて知った「かに面」にわくわくし、訪ねる際の楽しみが増えました。一方で、地域資源が揃っていても都市部への人の流れが止まらず策を練っている人たちがいます。「北陸地域の活性化」に関する研究助成事業を募集しています。今年も地域を元気にしようと頑張っている人たちを応援し紹介していきます。  
(事務局)

## 地域づくり in ほくりく 第6号

発行 平成27年1月5日  
編集 一般社団法人 北陸地域づくり協会  
〒950-0197  
新潟市江南区亀田工業団地二丁目3番4号  
電話 (025)381-1160  
FAX (025)383-1205  
HP: http://www2.hokurikutei.or.jp